



きんひが通信

令和2年2月14日
〈第43号〉
校長 平塚智康

地域の特色ある行事から学ぶ ～御願神事（竹割祭り）～

2月10日（月）、菅生石部神社で「御願神事（竹割祭り）」が行われました。2・3・6年生が、生活科・社会科・総合的な学習の一環として、見学に訪れました。

ちなみに、社会科のねらいは「地域の人々が受け継いできた文化財や年中行事には、地域の生産活動やまちの発展、人々のまとまりなどへの願いがこめられていることを理解し、地域社会に対する誇りと愛情を持つ」ということです。

御願神事（ごんがんしんじ）とは？

石川県指定無形民俗文化財。その起源は、『神社明細帳』によると、天武天皇御願にて宝祚長久国家安全の神事として始められたとの記述がある。また昔、この地に大蛇がすんでいて、毎年未婚の娘を差し出さねば田畑を荒らしてしまうので、これを退治するためにこの神事が生まれたとの伝承もある。神事は、第一板の合図でワラと竹で出来た高さ3mほどの『あずまや』に点火し、続いて、第二板の合図により神社下で待機していた白装束の青年たちが、長さ2m程の青竹を手に、一斉に鬨の声を上げて境内になだれ込み、石畳に青竹を打ちつけ割りつくす。青竹がほとんど割られた頃、青年たちは大蛇に見立てた長さ25m、重さ150キロに及ぶ大縄を境内にて引き回し、最後に敷地天神橋の上から大聖寺川に投げ込んで神事が終わる。割られた竹は見物人が持ち帰り、魔除けのため玄関に置いたり、箸にして健康・病気平癒・虫歯予防を願います。



【児童の感想より】

2年生

2月10日に、竹わりまつりに行きました。みているほうは、さむかったけど、竹をわっている人たちは、さむそうじゃありませんでした。ぎゃくにあつそうでした。はじめてみて、とてもふとい竹をわっている人もいました。さいごの大じゃも思ったより長くてすごかったです。

2年生

竹わりまつりに行ったらお父さんとおじいちゃんがいたよ。お父さんがカブよくわってすごかったよ。お父さんは、はんそでだったけど、「さむくないのかな」っておもいました。

2年生

竹をおとながなげて1ぱつでわっていてびっくりしました。おとなが1ぱつ2はつでわっていたから、かっこいいと思いました。ほくもやってみたいです。

3年生

ほくは、竹割祭りを何回もみたことがあります。小学生で、竹割祭りを見に行くのははじめてです。こんなぶあつい竹をわるのがすごいと思いました。最後に大蛇を川に投げるのがかっこよかったです。ほくも大人になったら、竹割祭りにでたいです。

3年生

私が一番心にのこったのは、わか竹の一番大きな竹を二回だけでわったところがすごいと思いました。あんな大きな竹をわるとき、きもちよさそうでした。私は女だけど、ちょっとやってみたくなりました。

私はもらった竹で、はしをっておばあちゃんの病気をなおしたいです。

3年生

2mの竹をはげしくうちたたくところが心にのこりました。わけは、竹をうちたたく音を聞くと、すっきりしたからです。来年もまた見に行きたいです。

自分も大人になったら、やってみたいと思いました。2mの竹をわるのがかっこよかったです。2回ぐらい大じゃをなげるのを見ているけど、大じゃをなげるのがすごいと思いました。

3年生

参加している人で血が出ている人もいて、参加している人は全員一生けんめいなんだなと思いました。あと竹を地面にぶつけてわったりしてはく力がすごかったです。

最後に大じゃを川に投げるときに、大じゃが流れていってすごかったです。しかも、竹をげんかんにおくと、まよけにもなるのですごいです。

3年生

すごいたくさん竹を、白しょうぞくのみなさんがわっているところが、とてもかっこよかったので、ほくも大きくなったら、竹割祭りにさんかして、竹をわってみたいです。ほくは、今回はじめて竹割祭りに行ったので、今まで感じたことのないはく力がかんじられました。

3年生

さいしょわらが10分くらいで全部もえてびっくりしました。血を流してまで、やってくれるのがうれしかったです。私は、はじめて竹割祭りに行きました。こんなに楽しくて、もり上がるとは思ってなかったです。

「そいや」のかけ声とともに、たたきわる竹一本一本が大聖寺の人の宝物だと思います。これは、大聖寺のすてきな伝統文化だと思います。



大聖寺の春を告げる、菅生石部神社の「ごんがん」。長い年月に渡って受け継がれてきたこの伝統行事に直に触れることによって、子どもたちは、行事に込められた地域の人々の願いや思いに気づいたようです。3年生は、12日にも神社を訪れ、宮司さんから御願神事の由来や歴史を聞き取り、学習を深めていました。

若衆の中には、私が以前受け持った子どもたちもいました。彼らが地域の伝統文化を受け継いでがんばっている姿を見て、とてもうれしく思いました。そして、今の2・3年生の中からも、この伝統文化を受け継いでいく後継者が出てきそうで、とてもたのしく感じました。